唐招提寺西方院所在の證玄和尚五輪塔と出土蔵骨器について

佐藤亜聖

はじめに

中世の唐招提寺にとって最も重要な人物として、中興大悲菩薩覚盛上人の名前がまず挙げられる。しかし、実際の伽藍復興に大きな役割を果たしたのは、覚盛上人の跡を継いだ中興第二世圓律上人證玄和尚であった。近年、西方院に所在する證玄和尚の五輪塔について解体修理が行われ、その地下から和尚の名を刻む銅製蔵骨器が出土した。その調査成果について報告させていただく。

一　圓律上人證玄和尚について

證玄和尚に関する記録は『本朝高僧伝』や『律苑僧宝伝』、『招提千歳伝記』など少数の文献に限られており、唐招提寺復興に果たした功積の割に史資料が少ない。これら残された史料より確認できる和尚像について概観しておく。

證玄和尚は承久二年（一二二〇）に大和国山辺郡鋒立郷（今の大和郡山市新庄町付近）で生まれる。興福寺常喜院において覚盛上人に出会い、その門弟に加わって僧侶としての活動を開始する。その後、覚盛上人の入滅に伴い唐招提寺長老に就任するが、就任直後から積極的に伽藍の復興に着手し、金堂・講堂・東室の修復、本尊脇侍千手観音像・瑠璃光仏

の修復、戒壇の再興、湯屋院・僧厠の再建、牟尼蔵院の建立などを成し遂げた。また、導御や凝然など多くの弟子を育て、最期は正応五年（一二九二）八月三日に病のため入滅したとされる。

二　西方院證玄和尚五輪塔と地下遺構について

西方院證玄和尚五輪塔（県指定文化財。以下、證玄五輪塔と呼称）は西方院本堂東側に位置する（**写真1**）。高さ約五一・三cmの基壇を持ち、基壇を除く高さ二五九cmを測る。空風輪が大振りで、火輪の軒厚が厚く、火輪・水輪・地輪の幅が揃うもので、西大寺奥ノ院叡尊五輪塔に共通する形状を有する。台座の反花は子弁を持ついわゆる子持複弁の形状を有し、間弁は四隅に位置する。基壇は切石壇上積基壇であるが、束柱や格狭間がなく、明らかに後補の様相を持つ。『招提千歳伝記』第四冊（昭和女子大学近代文化研究所二〇〇四、**【史料】**）に「再ヒ営二造ス之一也」の記載があり、この時再造営されたのがこの基壇であったと考えられる。本塔の年代についてはかつて黒田昇義氏が形態と表面状態の観察から元禄年間のものとされ、これに対し川勝政太郎氏がその様式から鎌倉時代説を展開した経緯がある（黒田一九三九、川勝一九六九）。

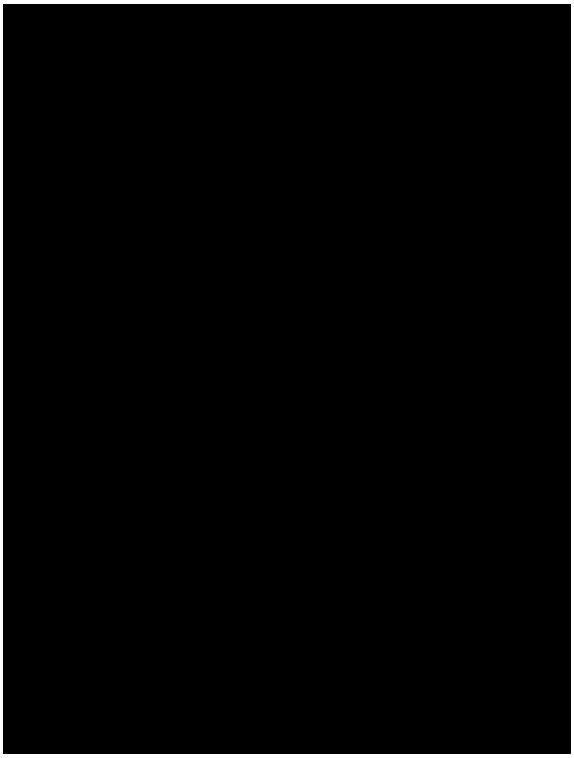

写真1　證玄和尚五輪塔

さて、『招提千歳伝記』第四冊には左記の記

載がある。

【史料】

西廟

西廟ハ者、有リ二西方院。内ニ以テ石ヲ一レ作ル二五輪ノ浮都ヲ一。高サ一丈許リ也。是則チ中興大悲菩薩ノ之廟也。前有二灯炬。今年為リ二四百五十年ノ之遠忌。故再ヒ営二造ス之ヲ一也

この記載から、遅くとも本書が編まれた元禄十四年（一七〇一）には唐招提寺中興覚盛上人の塔とされていたことがわかり、その後も長く上人の墓塔と信じられてきた。ところが、昭和四十四年（一九六九）五月十日に行われた解体修理で、蔵骨器が出土して銘文が明らかになったことから、覚盛上人ではなく中興二世證玄和尚の五輪塔であることが判明し、話題を呼んだ。

この解体修理では五輪塔直下の基壇内部に石臼で蓋をした石組が見つかり、内部に据えられていた石櫃の中から銅製蔵骨器が発見された（岩波書店一九九一）。この調査は不時発見ということもあり詳細が不明だが、西方院所蔵古写真の観察からは、解体修理に際して石室すべてを解体したようである。

その後、五輪塔の傷みが目立ってきたため平成三十年（二〇一八）七月十日から十三日にかけて、五輪塔の解体修理を行い、併せて元興寺文化財研究所が奈良国立博物館の協力のもと、地下遺構の調査と出土蔵骨器および内部人骨の調査を行った。

三　五輪塔地下遺構の構造

五輪塔を全て解体し、反花座を除去した直下に、直径三〇～四〇cmの河原石を組み上げた石室が見つかった。石室は川原石を四～五段積み上げて構築しており、内法直径約六三cm前後、深さ七二cm前後を測る（**図1**）。石室内には直径

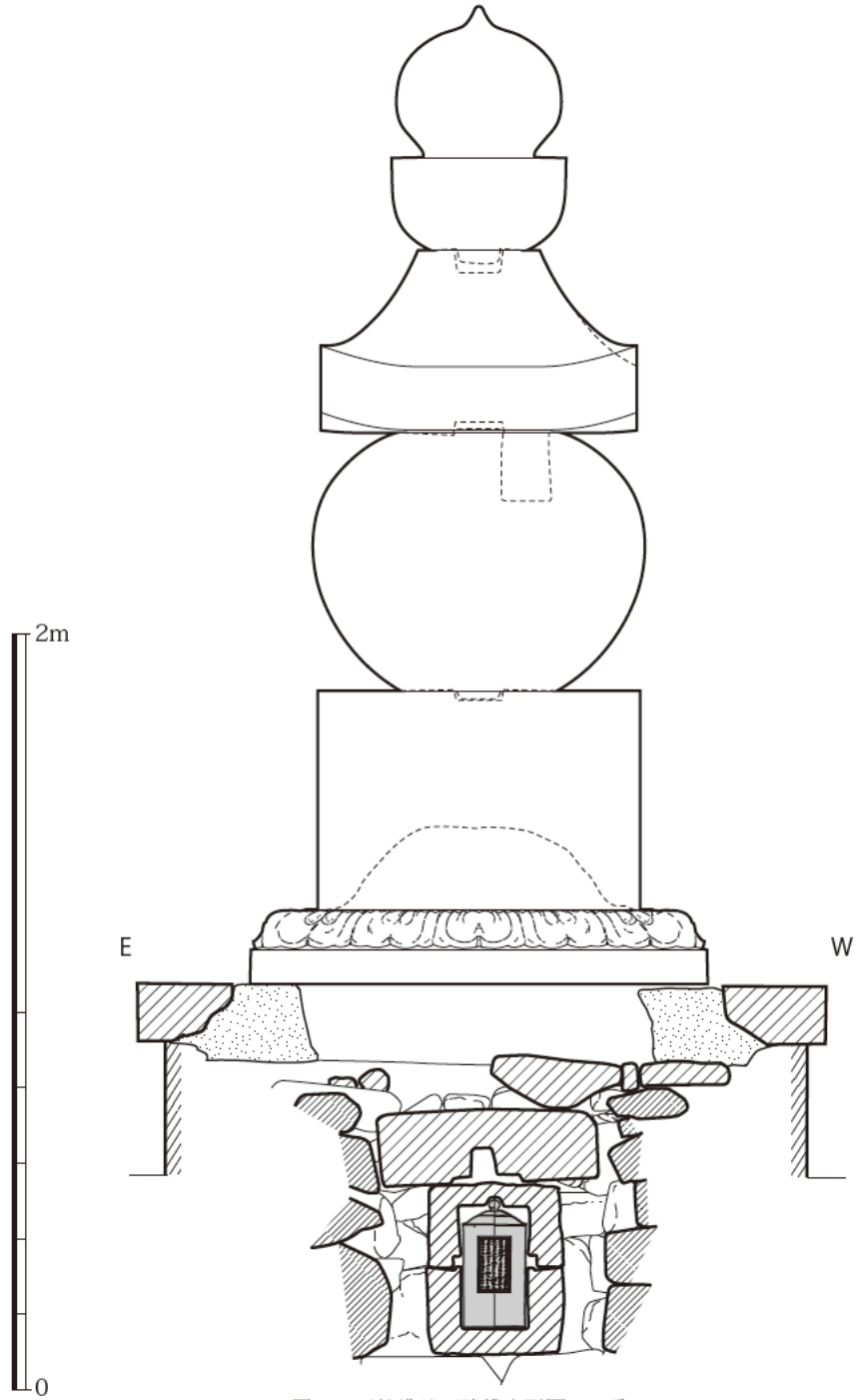

図１　五輪塔地下遺構実測図　20分の１

五九cm、厚さ二〇cmの安山岩製石臼（**図2**）を伏せて蓋にする。石臼は擦り部が摩滅しており、一定期間使用されたものが再利用されている。この安山岩石材はやや赤みを帯びて、長石粒を多く含むもので、関西地域では類例を見ないものである。

石臼直下には花崗岩製石櫃を安置していた。石櫃は本体が直径三五・九cm、高さ二三・三cm、蓋は直径三五・八cm、高さ二二・六cmを測り、内法は蔵骨器規模に近似する直径一七・八cm、高さ三四・〇cmを測る。内外全面にノミ痕を残す。蔵骨器はこの石櫃内から発見された（**図2**、**写真2**～**4**）。石櫃内法が蔵骨器にほぼ一致しているため、いったん取り出した蔵骨器を再び石櫃内に戻すことは困難であった。

写真2　石室蓋石検出状況

写真3　石室内石櫃検出状況

写真4　石櫃開封状況

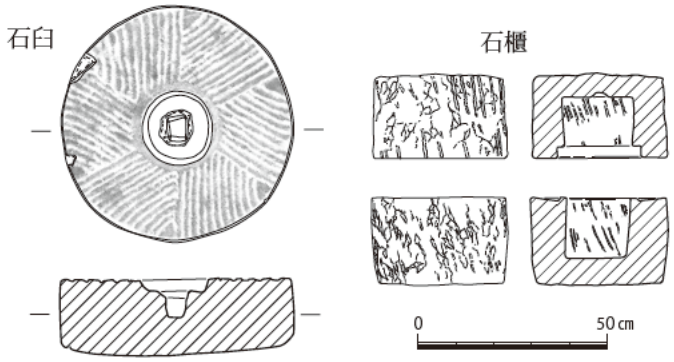

図2　五輪塔下石室蓋に転用された石臼と蔵骨器外容器の石櫃　20分の1

今回明らかになった五輪塔地下遺構の構造は、昭和四十四年の解体修理で見つかったものと酷似している。昭和四十四年の調査では石室がいったん解体されているので、今回見つかった石室は再建に際して旧状に忠実に復元したものと考えられる。

四　蔵骨器の概要

今回再発見された證玄和尚蔵骨器は、筒状の本体と宝珠状つまみを伴う蓋を持つ（**図3**、**写真5**）。證玄和尚と深い親交のあった忍性菩薩の蔵骨器は瓶形をしており、舎利瓶に擬したものであるが、證玄和尚蔵骨器はこれとは異なり、経筒、舎利容器との共通点が見られる。

本体高二七・一cm、蓋を含めた総高三三・八cm、本体直径一六・八cmの銅製で、蓋と本体は三箇所に穴を空け、銅製ピンを打ち込んで固定する。本体は円筒を一鋳で成形し、轆轤引きによって厚さ一㎜前後に仕上げる。底板は別鋳のものを取り付ける。本体中央には幅八・九cm、高さ一四・九cm、厚さ二㎜の銅板をリベットで留め、銅板にはタガネで左記の銘文を刻む（**写真6**）。

日本國和州唐招提寺律法再興第二
和尚證玄（圓律上人）所生同國山邊郡鉾立
郷人也兼久二季（庚辰）七月七日（辰日辰剋）誕生

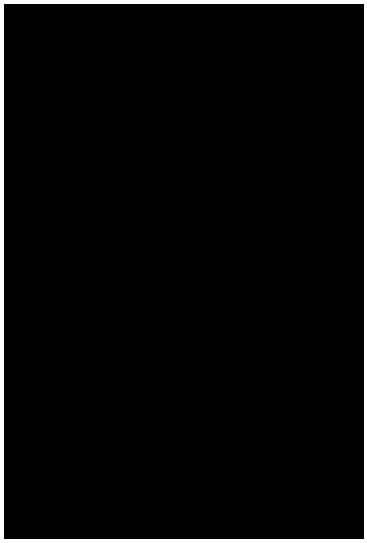

写真 6　銘 板

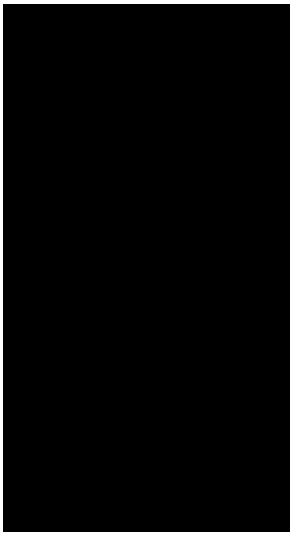

写真 5　蔵骨器

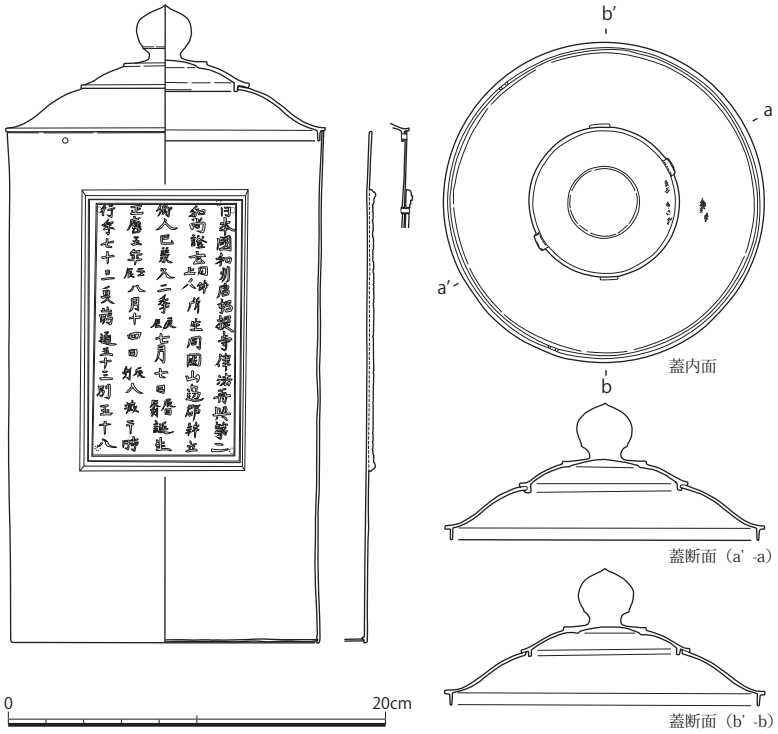

図 3　證玄蔵骨器実測図　4 分の 1

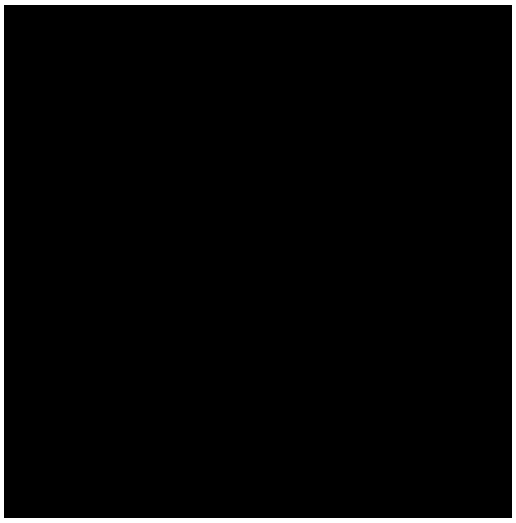

写真７　蓋内面

正應五年壬辰八月十四日辰刻入滅于時
行年七十三夏臈通五十三別五十八

これにより證玄和尚の出身や没年、入滅時の年齢を知ることができる。

蓋は、最大径一七・〇cm、高さ四・一cmを測る。上下を別材で造り出し、高さ二・七cmの付近で組み合わせる。蓋上段は最大径九・〇cmを測り、上下はソケット状に組み合わせる。こうした構造はこれまで例がなく、特殊なものである（**写真７**）。

僧侶の蔵骨器についてはこれまで竹林寺（生駒市）・額安寺（大和郡山市）で見つかった忍性菩薩の蔵骨器をはじめ、国内各地で出土しているが、今回再発見された容器は二段構造の蓋や銘文を刻んだ銅板を鋲留めする手法など、他に例を見ないものである。

五　蔵骨器内部の調査

蔵骨器はその保存のためにも、内部の人骨をすべて取り出す必要があった。そこで、まず元興寺文化財研究所と奈良国立博物館が共同でX線CT撮影調査を行い、蓋の密閉方法と人骨の状況を確認し、開封の方法を検討した後、開封し、人骨の取り出しを行った。

人骨は口縁部直下約三cm前後まで入っていたが、いずれも一～二cmの細片に砕いて納入してあり、残存状況は良好でない（**写真８**）。骨の取り上げはX線CT画像を参考に、上層から番号を付けて順に行った。蔵骨器内部は大きく三層

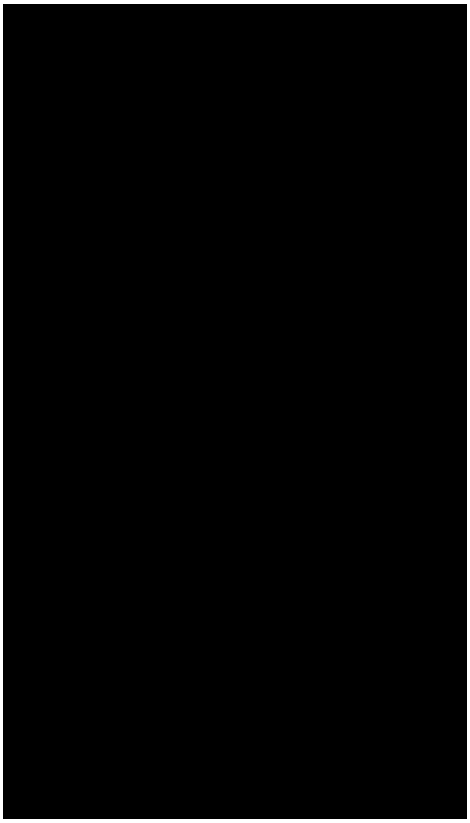

写真８　蔵骨器Ｘ線ＣＴ画像

に分かれる。上層は二cm内外のものが多く、骨の向きに規則性は見られない。中層には比較的大きな（約五cm角）頭骨を水平に複数敷き詰めて配置し、そのうち六枚には墨書が確認された。下層は一cm程度に砕かれた骨を主体とし、骨の向きに規則性は見られない。なお中層以下には水が溜まっており、このためＸ線ＣＴ画像が明瞭でない。

ところで、今回発見された人骨をＮＰＯ法人　人類学研究機構（代表・松下孝幸氏）に委託して部位特定と分析を行ったところ、上層から出土した骨の中に左上腕骨および頭骨に重複があり、下層の骨を含めて少なくとも三体分以上の骨が納められていることが判明した。墨書骨以下が證玄和尚で、上層人骨は追葬されたものと考えられる。その場合、蔵骨器の容量、蓋の特殊構造は追葬のための設計であった可能性が考えられる。

六　墨書骨について

墨書骨は合計六枚が確認できた。いずれも頭蓋骨に墨書しており、片面のみ墨書するものと両面に墨書するものがある。

墨書は大日如来三身真言、光明真言、往生を願う願文で構成され、筆跡から二名程度の人物が書写したと考えられる。

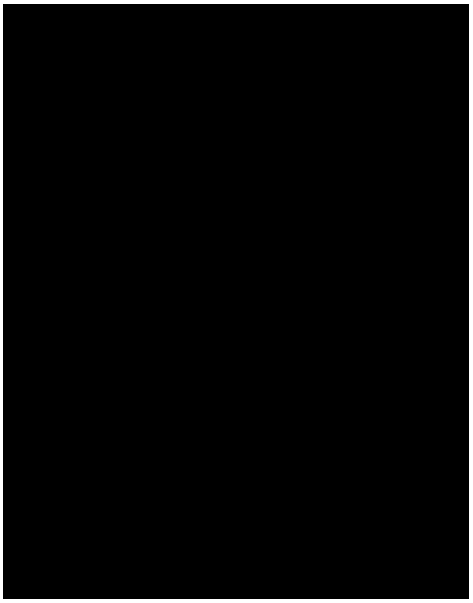

写真 9　墨書骨①

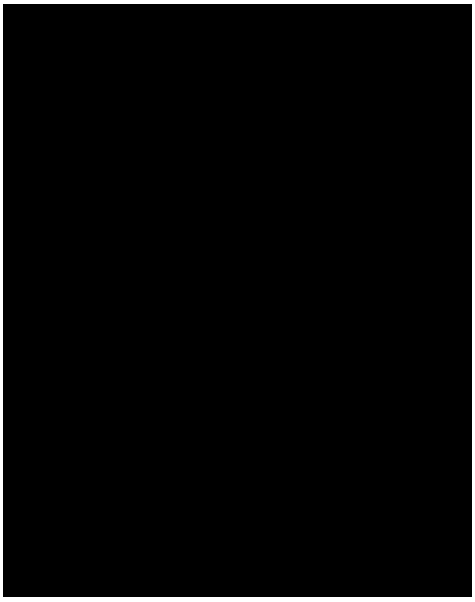

写真10　墨書骨②

これらを「弟子快真」が代表して署名している。墨書の内容については以下の通りで、配置されていた順序からは、まず金剛界大日真言、大日応身・報身真言と快真の名が書かれたものを配置し（**写真9**）、大日応身真言と願文を記したものを配置、その後複数に分割した光明真言を墨書し、最後に一枚裏表に光明真言をまとめた上で弟子快真が署名している（**写真10**）。冒頭で快真が署名していることを考えると證玄和尚の骨に快真が署名し、「同垂引摂」を願っていると読むべきであろう。この快真という人物については現在調査中である。

①（内）オン・バ・ザラ・ダ／タ・トバン／ダ（金剛界大日真言だが二文字多い）＋快真
　（外）ア・ビ・ラ／ア・ラ・ハ・シャ・ナウ／ウン・ケン（大日応身真言を報身真言で挟み込む）
②（内）ア・ラ・ハ／シャ・ナウ（大日応身真言）
　（外）七世四恩一切／衆生引稱／垂（願文）
③（内）キャ・ベイ・ロ・シャ（光明真言）

（外）ナウ・マ・カー・ボ・ダラ・マ・ニ（光明真言）

④（内）ハラ・バ・リタ（光明真言）

（外）ハン・ドマ・シンバ・ラ（光明真言）

⑤（内）ヤ・ウーン（光明真言）

（外）なし

⑥（内）オン・ア・ボ・キャ・ベイ・ロ・シャ・ナウ・マ・カー・ボ・ダラ・マ・ニ・ハン・ドマ・（ジンバ）（光明真言）

（外）ラ・ハラ・バ・リタ・ヤ・ウーン　弟子快／真　敬白同／垂引摂（光明真言＋願文）

まとめ

今回の蔵骨器再発掘によって、これまで写真でしか知られていなかった證玄和尚蔵骨器について、その具体的な構造等が明らかになった。證玄蔵骨器は詳細な銘文の存在から、時代と被葬者がわかるものとして非常に貴重な事例とされながらも、再埋納されていたため実態がわからなかったが、今回これを再調査できたことにより新たな知見が得られた。まず、蓋が上下段の二重構造となっている特殊な構造が判明した。これは人骨の分析により追葬が確認できたことによって、追葬を予定した構造であったことが想定される。さらにX線CT撮影による内部観察と骨の層位的な取り上げからは、最初の蔵骨に際して容器の三分の一程度しか骨を入れていないことも明らかになり、蔵骨器の大きさ、骨の納め方などすべてにおいて、当初から追葬を想定した構造であったことも明確になった。

こうした追葬を計画したのは「快真」をはじめとする弟子たちであったと考えられる。覚盛から唐招提寺復興を引き継ぎ、伽藍復興を成し遂げた證玄の時代は、律宗教団形成期であった。当時、叡尊・忍性・信空を核として西大寺を中心に西大寺流律宗教団が形成されていたが、唐招提寺においても證玄を核として強固な血脈によって結ばれた唐招提寺

流律宗教団が形成されつつあったことを、本蔵骨器は示しているといえよう。本蔵骨器の調査成果は、今後の律宗集団に関する研究に大きな意義を持つものと思われる。

付記

成稿にあたり、墨書骨の判読について服部光真氏（元興寺文化財研究所）、真言・願文の意義について辻村泰善氏（元興寺住職・元興寺文化財研究所理事長）、三宅徹誠氏（元興寺文化財研究所）、人骨の分析について松下孝幸氏（ＮＰＯ法人人類学研究機構）、人骨の年代測定について南雅代氏（名古屋大学宇宙地球環境研究所）、同位体分析について若木重行氏（国立海洋研究開発機構）、人名について細川涼一氏（京都橘大学）のご協力を頂いた。本稿は中間報告であるため成果を反映できていない部分もあるが、この場をお借りしてお礼申し上げたい。

なお、本稿は平成三十一年二月八日～三月十四日に奈良国立博物館で開催された企画展「鎌倉時代の唐招提寺と戒律復興」図録に掲載した同名論文を加筆修正したものである。再録を許可いただいた奈良国立博物館に謝意を表したい。

参考・引用文献

岩波書店一九九一『奈良六大寺大観』唐招提寺　巻一

川勝政太郎一九六九「唐招提寺證玄和尚五輪塔とその様式」『史迹と美術』三九七、史迹と美術同攷会

黒田昇義一九三九「大悲菩薩覚盛の廟塔」『史迹と美術』一〇七、史迹と美術同攷会

昭和女子大学近代文化研究所二〇〇四『招提千歳伝記』唐招提寺・律宗戒学院叢書　第一輯